

国内経済情勢

概観

生産は引き続き根強い増加を示しており、需要も設備投資、消費を中心に堅調を続け、企業収益も依然好調で、3月期決算は9期連続の増収、増益となった。

商品市況は、海外相場の軟化や資金面の制約による在庫手当ての手控えのほか季節的な事情も加わって、このところ落ち着きぎみに推移しているが、市況商品以外では引き続き製品価格引上げの動きがみられる。この間、春の賃金交渉では賃上げ率が前年をさらに上回った模様であり、今後物価面等に及ぼす影響が注目される。

一方、金融面では、決算資金など資金需要が増大しているのに対し、銀行などは引き続ききびしい抑制態度で臨んでいるため、企業の資金繰りは繁忙感を強めている。

4月の国際収支は、外人証券投資等外国資本の流入減などから黒字幅が縮小した。

生産は根強い増加基調

鉱工業生産(季節調整済み)は、3月に前月比+0.9%と微増のあと、4月(速報)は+1.6%の増加となった。3ヵ月移動平均値の前月比でも、1月+1.5%、2月+1.1%、3月+1.7%と月により多少の変動を伴いながらも根強い増加基調にある。4月の生産を財別にみると、一般資本財(化学機械、重電機等)、耐久消費財(乗用車、一

部家電製品等)が減少した反面、建設資材(橋りょう等)は著増し、生産財、非耐久消費財もかなりの増加を示した。

一方、鉱工業出荷(季節調整済み)は3月に前月比+3.9%と大幅増加のあと、4月(速報)は-2.8%の減少となった。これは前月著増をみた船舶の反動減が主因であるが(船舶を除けば前月比-0.5%、前月+1.5%)、そのほか家電製品、乗用車を中心とする耐久消費財の減少も目だっている。

この間、4月の生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、前月比+1.8%の増加(前月+0.3%)となり、製品在庫率指数(93.2、前月89.0、船舶を除けば4月92.3、前月90.2)は上昇を示した。

5月時点調査の本行「短期経済観測」によれば、大企業、中小企業とも引き続き生産、売上げの高い伸びを見込んでおり、製品需給についても当面なお需要超過を予想する向きが少なくない。

設備投資の動きをみると、先行指標である機械受注(船舶を除く民需、季節調整済み)は、1~3月に前期比+16.4%の大幅増加をみたあと、4月は前月比-1.4%の小幅減少となったが、なお高水準を続けている。また、4月の建設工事受注額(民需、季節調整済み、速報)は前月比+18.6%と増加し、3ヵ月移動平均でみても1月+4.7%、2月+1.5%、3月+3.3%と増勢を続けている。上記「短期経済観測」でも、設備投資は当面根強い増勢を続けるものと見込まれている。

なお、主要企業の3月期決算は、内外需の増大と製品価格の堅調を映じて、鉄鋼、化学、造船、

建設等を中心に、増収率、増益率とも前期をさらに上回り、41年3月期以来9期連続の増収、増益を記録した。

この間、全国百貨店売上高は、1～3月に前年同期比+21.9%の高い伸びを示したあと、4月は天候不順の影響もあって前年同月比+19.4%とやや伸び率が鈍化したが、依然高水準を続けている。

商品市況は引き続き落着きぎみ

最近の商品市況をみると、化学製品、重油等は堅調を続けているものの、鉄鋼が条鋼類を中心にじり安をたどっているほか、綿糸、生糸等の天然繊維や非鉄金属が反落し、合成繊維、洋紙、木材も総じて軟調に推移するなど、弱含みを示しているものが多い。

このような商品市況の落着きには、海外相場の軟化(非鉄金属)や輸出成約の不ざえ(合繊、鉄鋼)、資金面の制約による商社や実需筋の在庫手当て圧縮などの要因が響いているが、季節的な不需要期入り(建材)といった事情や株価低落の定期市場への影響(繊維)も見のがせない。

4月の卸売物価は、鉄鋼が反落した反面、繊維品、機械器具等は引き続き上昇し、総平均では前月比+0.4%(前年同月比+5.1%)の続騰となった。5月にはいってからも上旬は前旬比+0.1%の上昇を示したが、中旬は鉄鋼、非鉄金属、食料品の下落から-0.1%の小反落となった。もっとも、機械器具等では引き続き製品価格引上げの動きがみられる。

一方、消費者物価(東京)は、4月に前月比+0.7%上昇のあと、5月(速報)は食料、被服、光熱費の下落から-1.2%の低下(前年同月比+6.7%)をみたが、季節商品を除けば+0.1%と依然騰勢が

続いている。

春の賃金交渉の妥結状況をみると、労働力需給のひっ迫などを背景に、賃上げ率(日経連調べ主要企業+17.5%)は前年(同+15.6%)をかなり上回り、既往最高となった模様で、その物価面等に及ぼす影響が注目される。

決算要資期を迎え企業の資金繰り繁忙感強まる

5月の金融市場では、銀行券が月中1,361億円の還収超(前年同1,510億円)となった一方、財政資金は月中706億円の揚超(前年同1,260億円)となったが、本行は短資業者に対する政府短期証券の売却などにより余剰資金を吸収し、コール市場は通月引きゆるみをみせることなく推移した。

銀行券の月中平均発行残高の前年同月比増加率は、3月+19.4%、4月+19.5%のあと、5月は+19.3%とこのところ高水準横ばいに推移している。

4月の全国銀行貸出は、不要資月にもかかわらず月中810億円の増加(前年同月56億円増)となり、月末残高の前年同月比伸び率も+16.5%(前月+16.3%)とわずかながら再び上昇した。月中貸出増加額を業態別にみると、都市銀行は、従来からの繰延べ需資の累増もあって、月中増加(300億円増、前年83億円減)を示し、地方銀行は、中小企業の資金需要の高水準持続などから月中増減なし(前年同月240億円減)となった。また、長期信用銀行は設備資金需要の増大からかなりの貸出増加(月中536億円増、前年同月432億円増)をみた。一方、中小企業金融機関の貸出は、相互銀行が比較的小幅の増加にとどまったのに対し、信用金庫は引き続き大幅な増加を示した。

企業の資金繰りは、4月から5月にかけて季節的事情もあり総じてみれば比較的平静に推移した

模様であるが、このところ決算資金需要が増高をみているのに対し、銀行などはきびしい抑制態度で臨んでいるため、資金繰り繁忙感が強まっており、法人税延納の動きも目だっている。前記「短期経済観測」をみても、大企業では資金繰り難を訴える向きがさらに増加しており、手元流動性が引き続き低下傾向を示しているほか、支払条件も若干悪化している。一方、中小企業でも、大企業ほどではないものの、金融機関の貸出態度がきびしくなり、資金繰りが苦しいとするものがふえてきている。

この間、4月の全国銀行貸出約定平均金利は、長期貸出金利の引上げもあって月中0.009%の上昇(前月+0.005%)となった。

公社債市況は、金融市場の季節的な資金余剰期入りを背景に4月にはやや持ち直したが、5月央ごろからは決算資金流出期を控えた企業の手持債券売却がみられ、再び弱含みとなっている。なお、株式市況は、4月末に急落をみたあと薄商いのうちに統落歩調をたどったが、5月末近くから海外株価の上昇をながめて反発を示している。

4月の国際収支は小幅の黒字

4月の国際収支は、貿易収支が316百万ドルの黒字(前月同399百万ドル、44年度月平均同311百万ドル)となったものの、長期資本収支が外人証券投資等外国資本の流入減を主因にかなりの赤字(121百万ドル、前月は対世銀貸付を除けば同75百万ドル)を示したことなどから、総合収支では53百万ドルの小幅黒字(前月同167百万ドル)となった。この間、金融勘定では、為替銀行の対外

短期ポジションは2百万ドル好転し、外貨準備は月中55百万ドルの増加となった。なお、5月の外貨準備は、外人の株式売却に伴う外国資本の流出などから月中22百万ドル減少し、月末残高は3,901百万ドルとなった。

4月の貿易収支を季節調整後でみると、輸入が前月比+1.9%とかなりの増勢を続けた一方、輸出も前月比+1.1%と順調な伸びを示したため、収支差額では310百万ドルとほぼ前月(317百万ドル)並みの黒字となった。

4月の輸出は、前年同月比では+21.9%の増加(前月+23.0%)となった。品目別にみると、化学製品、鉄鋼、事務用機器等が引き続き高い伸びを示した反面、繊維製品、陶磁器等は低調に推移し、テレビも前年を下回った。また、仕向け先別には、西欧、中南米、共産圏向けが好調を続けた反面、米国、東南アジア向けは伸び率の低下が目だっている。なお、先行指標である輸出信用状接受額は、4月に前年同月比+21.8%のあと、5月は+19.6%となった。

一方、4月の輸入は前年同月比+34.2%(前月+33.2%)と引き続き高水準を示した。品目別にみると、鉄鋼・非鉄原料のほか、機械、化学製品も高い伸びを続けている。なお、4月の輸入承認額は前年同月比+4.3%(前月+33.9%)と伸び率が著しく低下したが、これは前年同月が一部品目の輸入承認集中から著増をみたことによる面が大きい。

(昭和45年6月5日)